
つながるせかい

天翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つながるせかい

【Nコード】

N4974B

【作者名】

天翔

【あらすじ】

どうって事はない小さな出会いの話です。

十月も終わりに近づくと、世間は寒くなってきた。

『寒くなると嫌だね』

あきさと秋里という女は、その日すれ違った何人かの人間の厚着姿を見て思っていた。

朝も早いせいか、人々はもう結構な厚着になってきていた。もつとも秋里もロングのコートを着て寒くないようにはしていた。

ほとんど夜が混じっているこの時間帯に出歩事は、かなり寒いこともあって余りしたくなかったが、コンビニにでも行かなければ飢え死にしていまいそうな状況では仕方なかった。もっともそれは秋里自身の生活習慣が原因なのだが。

買ってきた肉まんの最後の一個を手にして食べ始めたところで、住んでいるアパート近くの公園に着いた。

そのまま公園を突っ切っていけば、家はすぐそこだった。

秋里は公園に入った所で何となく辺りを見回した。普段はそれなりに賑わっている公園なので、人気がないと何処か気味が悪かった。視たくないものが見えてしまう気がしてしまう。

『あーっ、嫌だ嫌だ』

秋里としては無意識的にやってしまう自分の行為に嫌気がさした。そして、自分がこんな事をするようになった原因を恨めしく思った。しかし、それで結果が変わるわけではない。

結局は見回すという行為が致命的だった。

『ついてないねまったく』

秋里は自身に悪態を吐かずにはいられなかった。今日の運勢は最悪だと思えなかった。

秋里の視線の先には、一人の少女が道路脇の電柱の下に立っていた。それだけなら家出少女ぐらいの話で済む。だが、明らかに少女の格好はおかしかった。

俯いているので顔はよく見えないが、少女が着ているのはどこかの学校の陸上部のユニフォームだった。ジャージの上を羽織ってはい

るものの、その格好ではかなり寒いはずだ。
しかし少女は身震い一つしない。まるで少女の周りだけ寒さがな
いかの様だった。

秋里は彼女が何なのか直ぐにわかった。

わかってはいたのだが、幾つかの疑問が彼女の好奇心をくすぐつ
た。

『好奇心は身を滅ぼすとはよく言ったもんだ』

秋里は最後の肉まんを食べ終わると、少女へとゆっくり近づいて
いった。秋里は正面にいたので背格好はわかったが、手に持ったノ
ートに何かを書き込んでいるため顔は見えなかった。

少女から一番近い公園の出入口にたどり着いても、少女はまだ秋
里に気付かずに、相変わらず熱心に何かをノートに書いていた。

気付かないと言うよりは、秋里が見ているとは思っていないのだろ
う。

『まあ、それが普通か』

自分があっさり普通ではないと宣言をしていることに苦笑いしな
がら、秋里は覚悟を決めた。

「何してるの？」

声をかけられると少女は顔を上げ辺りを見回した。すぐには自分
が話しかけられていることが信じられなかったようだった。

辺りに他に誰もいないのを確認した後、少女は秋里の方を見て恐
る恐る自分を指さした。

秋里は少女と目を合わせたまま小さく頷いた。

「どっ、どうも」

状況が飲み込めていないらしく、少女はきよんとしていた。

「みっみてますか？」

もう一度頷きながら、見えてなけりゃ話しかけれんだろう、と秋

里はつつこみたくなった。

「あ、私は秋里。まあ見えることは見えるの」

「私はふかもり深森って言います…始めまして…」

少女——深森はそう言うのと深くお辞儀をした。

その顔には話しかけられた事への喜びが滲み出てきていた。

深森はどこか儚げな雰囲気のある顔をしていた。もともと体が弱かったのかも秋里は思った。

「君さ……深森ちゃんがいい？」

はい、とすぐに答えが返ってきた。答えを聞いてから秋里はもう一度深森にゆっくりと質問した。

「深森ちゃんは……この辺りの子じゃないよね……ここで何してるの？」

近くの学校のユニフォームの様だが、最近彼女を見た覚えはなかった。

すると深森は少し俯き加減になって小さく言った。

「人が来るのを待ってるんです」

深森は手に持っていたノートをギュッと抱きしめた。それだけで秋里には何となくわかった。

「待ってるの男の人？」

少女の顔がみるみる赤くなっていく。

『わかり易い子だな』

深森の反応に秋里はむずがゆさを感じた。純情が伝わってきていた。

そして気付く、彼女の感情にほとんど悲しみが無い事に。

秋里は深森の隣に移動してブロック塀にもたれ掛かった。

「どうしてここで？」

彼女はここの人じゃないから、何故こっちに移ってきたのかが秋里は気になった。移ってくる人を見かけることはあまり無かった。

こんな所で待ち合わせも無いだろうが、

深森はちよつと恥ずかしそうにしながら、これと言ってノート

を開いて見せた。そこには十六・七の少年の走っている姿が描かれていた。その下にはいくつものメモが取られていた。これが待っている人なのだろう。

「その人がここをジョギングで通るんです」

深森は少年の話をするときとても嬉しそうだった。聞いているとこっちまでいい気分にくれる。だからこそ秋里は更に深く疑問に思った。

この子はどうしてこんなに幸せそうなんだろう？

「その人は陸上部の人？」

深森は小さく首を横に振った。

「じゃあなんで走ってるの？」

お願いをしたんです、と頬を赤くして照れ笑いを浮かべた。

『どんな状態でも男の子は女の子のお願いには弱いんだ』

そんな風に考えるととても可笑しかったので、秋里は深森に笑顔を向けた。

だが、結局そこで話題は止まってしまった。

結局聞かずにいることは出来なかった。

「ねえ深森ちゃん。どうしてそんなに笑っていられるの？」

ひどいことを聞いている。そんな想いが秋里にのしかけてきたが、それでも止めることは出来なかった。

止められなかった言葉が関を切った様に流れだす。

「どんなに頑張ったって、あなたはもう壁を越えることは出来ないのよ。思いだって届く事は ないのに……」

秋里は悔やんだ、言ってしまった自分を、自分自身の身勝手さを。言ってしまったって残ったのは深い後悔と悲しみだけだった。

深森は微笑んでいた……

悲しみに染まると思われたその顔には小さな微笑みが浮かんでいた。

「そんなこと無いですよ……」

少女は小さくそう言うと、秋里の反対側の道を見つめた。

秋里も塀にもたれ掛かるのを止めてそちら側を見た。

一人の少年がこちらに向かって走ってきていた。顔が隠れていなかったのですねにわかった。

『ノートの男の子だ……』

体格、顔立ち、走っている姿、その全てが絵の少年と一致していた。

秋里はしばらく少年の方を見つめていた。すると、だいぶ近くまで来た所で、深森が少年に向かって手を振った、とても嬉しそうに。どうして深森がそんな事をするのかわからずに見ていると、少年は……深森の方を見て小さく微笑んだ。

まさかと思えなかった。秋里はそんな事があるのかと驚くしかなかった。

少年は秋後に向かって、走りながら小さく頭を下げると、そのまま走り抜けていった。

秋里は少しの間気持ちの整理が着かなかった。

「ねえ……もしかして彼も？」

「はい。見えてます」

結局、他に理由等無かった。当たり前だったが、その当たり前が信じられなかった。

「繋がりましたよ」

深森は小さく言った。それが疑問の答えであることを秋里はなかなか気づけなかった。

「私の気持ちは彼に伝わりますよ……特別ですけどね」
そう言うときまた深森は嬉しそうに笑った。だから秋里は、

「ごめん」

としか言えなかった。

秋里はしばらく深森と話をして、その後帰路に就いた。話したのは少年と深森の出会いや、二人の関係など実に女の子らしい話題だった。

もう帰るからと言った秋里に深森は「ありがとうございました」と言った。

秋里は帰路をゆっくり歩きながら空を眺めていた。

深森のおかげで秋里は自分自身に向き合う気になれた。一生付き合っていくものを、しっかりと見据える事が出来た。

『ありがとね、深森ちゃん』

心の中でお礼を言った後、秋里はまえを向いて歩き出した。

肉まんの袋に突っ込んでしまった手が虚しかったが、買いに戻る気にはならなかった。

(後書き)

習作です。ご勘弁を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974b/>

つながるせかい

2010年12月14日19時03分発行